

論文内容の要旨

| | | | |
|--|--|----|-------|
| 報告番号 | | 氏名 | 高濱 潤子 |
| Retained placental tissue: Role of MRI findings in diagnosis and clinical assessment (和訳) 遺残胎盤組織:診断と臨床的取り扱いにおけるMRI所見の役割 | | | |

論文内容の要旨

分娩時に癒着胎盤などにより胎盤組織が自然脱落せず子宮腔内に残存する場合がある。この遺残胎盤組織の無理な剥離は大出血を来し得るため、メトトレキサート投与や経皮的子宮動脈塞栓術(UAE; Uterine arterial embolization)を施行後に自然脱落を待つか、時期を見て経腔的切除術が選択されることが多い。遺残胎盤組織はMRIで良好に描出されることはすでに報告されているが、本報告ではその遺残胎盤の画像所見と治療経過に着目して検討した。

対象は遺残胎盤組織が示唆されMRIが施行された11例であり、MRI所見を後方視的に検討した。MRI所見から、遺残胎盤組織の大きさ、T1強調像、T2強調像での信号、ダイナミック造影後の濃染パターン、濃染の程度、筋層との付着部の範囲、付着部の筋層の厚みを検討し、治療経過と比較した。

全例で遺残胎盤組織は明瞭に描出された。大きさは27.9 x 30 mm - 102.9 x 83 mmと様々であった。T1強調像では凝血した血腫を反映して11例中7例で高信号を示した。T2強調像では10例が高信号を示し、高度の梗塞と感染を来した1例のみ全体が低信号を示し特徴的であった。ダイナミック造影では漸増性濃染を来すものが8例、早期濃染を来すものが2例であった。UAE後はいずれの症例も血流低下が観察できた。遺残胎盤が付着した筋層は対側筋層と比較して全例で菲薄化していた。自然脱落を来した症例は5例、何らかの処置が必要となった症例は6例であり、自然脱落を来した症例はいずれも胎盤付着部の範囲は子宮内腔の半周以下であった。

出産後の子宮腔内の遺残胎盤の状態を把握するのにMRIは有用であり、同時に臨床上の治療方針決定の一助となることが示された。